

# 熊本県環境影響評価条例に準ずる公聴会公述

2024年3月5日(火)

鎗水 正美

## 1. はじめに

私は、この人吉球磨の中学校において、38年間中学校の教師として、子どもたちに物事を科学的に見ることの大切さを教えてきたつもりです。その中で、相良村に2回、13年間、球磨村に2回10年間、計38年間のうち23年もの間お世話になりました。その中で、先の水害では、<sup>人吉</sup>球磨村の愛甲君を亡くしました。残されたものとして今ここに立っています。

私自身としては、先の人吉水害において山田川から200mほど西のところ、床上70cmの浸水により、半壊の被害判定を受けた者です。もう二度とこのような被害が起こらぬように願っています。

さて、今回川辺川の流水型ダムに関する環境配慮レポート(要約書)を読みまして、二つの疑問・要望があり、そのことについて意見を述べます。

## 2. 要望①

まず、先の水害に関して、このような綿密なレポートを作成できる国土交通省が、山田川を始め、万江川、渡小川、神瀬川内川などの支流に関して、その降雨量や上流の山肌の問題に一言も触れていない点であります。

わたしの家に来た泥水は、すべて山田川のものであり、たとえ川辺川にどんなダムがあろうとも防ぎきれるものではなかったと思います。明らかに山田川にかかる染戸橋が、流木や泥流により「俄かダム」になり、間違いなく東側から城本、駒井田町を襲いました。これが先の水害における内水氾濫の真実です。

まず国や県のすることは、先の水害の事実や内水氾濫と犠牲者の関係性などの因果関係を調べ、そのことに対する対策を明らかにすることではないでしょうか。水害から4年が経とうとしている中、山田川は染戸橋以北は何の掘削もなされていません。堰の近くでは土砂が堆積し、コイが背中を出して泳ぎ、雑草が背丈をはるかに追い越し、川は半分も見えない状況です。あの時と同じような雨が降ったら、再び氾濫がおこります。いったいだれが責任をとるといえるのでしょうか。

## 3. 要望②

次に、レポート15ページ及び17ページの土壌に関わる環境その他の環境、地形及び地質に関しての要望にうつります。

レポートによりますと、選定する理由として、ダムの堤体の存在等による土地の改変に加え、洪水時のダムの洪水調節による貯

留により、重要な地形及び地質への影響の恐れがあるため、計画段階配慮事項として選定したとあります。

この点に関して、1998年に、松本幡郎元熊本大学教授などが、ダムサイトを現地調査した際、次のような危険性を指摘されています。

「ダムサイトの安全性についての4つの疑問・要望」

①川辺川ダムを建設する際、100mを超えるダムの翼端荷重を支える尾根の岩盤は、地質的に十分な強度を備えている必要があること。

②川辺川ダムサイトの真横の右岸側には、四浦トンネルが貫通している。このトンネルの全長にわたり、おびただしいクラックと漏水が発生している。現在の状況を明らかにされたい。

③ダムサイト右岸高所の地滑り地区とダムサイトとの間に変位計や歪計、傾斜計など、地質測定機器を設置しているか、設置している場合は、測定機器の種類や数、設置場所などの概要を示されたい。

④これらのダムサイト付近の状況から、100mを超えるダムの翼端荷重を支えることが地質学的に可能なのか疑問を感じざるを得ない。ダムサイト付近の岩盤状態に関しては、地質学の専門家からも、その安全性に疑問が投げかけられています。

さらに、1964年の九州におけるダムサイト基盤の地質学的研究の球磨川の項目において、次のように記されています。

同じく松本幡郎先生らによりますと、「球磨川は臼杵—八代構造線以南の地質をほとんど横切る形で流れる。支流五木川・川辺川は「時代未詳」と言われる中生層の走向に沿い、または斜めに横切り、再び古生界の地質を横谷の形で解析する本流、いずれも古期岩に沿うものであるから電源開発基盤として問題ないが、その構造線に沿うか、あるいは横切る大小いくつかの断層が発達しているので、地表で見る地形・地質のみでは解決しえないいくつかの条件がある。」と述べられています。

#### 4. 終わりに

このようなダムサイトに、震度6、7の地震が来た場合、ダム自体は耐えられるのでしょうか。今年には元日に能登地方に震度7の地震が起きました。地震は時と場所を選びません。もし川辺川ダムが雨季の満水の時期にそのような事態になった場合、どのような結果になるのでしょうか。ぜひ検証・報告してほしいと思います。以上で発言を終わります。